蒼月日乗　2

2019 年 8 月 18 日～

堀田展造

2020年5月12日(火)

書き直し中の「桜プラスチック/空中オルガン」所収　冒頭のテクスト
ともかく私家版で形にしようと思う。とはいえ、読者のことを想像しようにもほとんど実感がない。そんなものかとも思う。となれば、仮面の死者に込めた実感はかなりリアリティがあろうというものだ。
体調はあまりよくない。いや、「よい」という経験を探ろうとしてもぴんとこない。よくないという実感は思い返すとこれまでずっと、子供のころからもそうだったのかもしれない。いつかこのことをまとめて書きたい。周囲について書くことになる。

２月ごろから、ホームページ改作に没頭してきた。なんとか形になった。検索順位は1、2位をキープしそう。つまりこれで俺達の店の骨格が固まった。何年続けられるのか。おそらく数年が限界だろう。達思はどう受け止めているのか。このテーマは重い。とても重い。今の俺について書かなければならない。それでこのテクストに取り組んだというわけだ。テクストの中で俺は消える。お前が現れる。俺ではないお前。誰でもないやつだ。読み返すとどこかしっくりくる。これでよし。
一ヵ月以上続くかもしれない休業期間中だ。野菜畑を庭に作った。三人でスコップや鍬をふるった。こんな土臭い生活があろうとは思いもしなかった。種もまいた。まだ芽は出ない。
今日は賀津子が水をやった。

―他者亡霊論の研究１―
生きている仮面の死者

〈ふと立ち止まり
いつのことかは消え去り〉
空っぽの　黒い蒼穹にも見え
煌めく水の中の闇　太陽は反射を失う
　湧き上がる針　針
　視線の宙へ揮発し　すぐに目の奥に凝縮し
光の針を含んだ無言の**陽炎**――　**現れ？**　だが

眼差しは仮面の穴にすぎない
尽きない大気の熱病の中　夢が夢を食うように
一柱の噴水が空気を貪っていた

水柱が背骨を駆け上る　俺は針に撃たれ夢の中で穴を掘る
透明光の叫び　現れた陽炎の薄肌が群青に染まる
　断じて俺ではない　〈お前〉
おお　穴蔵の底　細笛の鋭い息遣い　生きている仮面の死者！
　〈俗信病者の甘ったるい共振話に惑わされるな！　たとえ俺と〈お前〉は仮面を挟み応答を重ね合わせているとしても！　俺はつねにその通りに書いているだけだ〉

〈胞子を抱いた水藻が黒々と揺らいでいた　泡立つビオラの文脈　褐色の記憶〉――凡庸な夢の水中だ　俺はあいつが撒き散らす水滴の想起を追いかけていた
　夢想の虚像は至上の装飾か

陽炎が水霧を吐く夢だった　相互の激しい息遣い　〈お前〉の
白い襞が色づく　惧れを知らぬ執着の抱擁だった
白煙の温りが証拠の薄いドレスを膨らませていた
　（虚像が証拠だと？）
　やがて霧散し
　最深の蒼穹に溶け
　〈お前〉は　輪郭を失う
深井戸に浮かぶ灰青の貌　固く口を閉じ　（お前は）　気づかれることなく限りなく懐かしい

半睡に射し込む翳　午後の白い窓を揺らし
「〈お前〉という語の指示形は何であれ　薄衣の影ゆえに　沈黙の書字が無色の平面（ある）を覆う」、とガラス窓越しに見た書に書かれてあった

　〈積上げた書の声……疫病の船倉　中性の街　慎ましい泰平の泥埃　宮殿は万能の光質を埋蔵するらしい……〉

　おお　過剰な文字の菓子　暗喩は蜜だ！

――光といえども窓枠の影に従い　尤もらしい無の形が崩れるだけだ　嗤うべき「冬の無」云々――

　闇と見紛う蒼穹の鏡

　犇き合う噴水の暗喩　必然かどうかは知らない

滑らかに透過し向き合う鏡面（トートロジー）の中

〈お前〉は最後の薄ドレスの鏡像をも脱ぎ捨てる

沸騰する空跡　緻密で無辺の

明るい闇　そこに

　今度こそ平面（ある）を拓く　本当か？

〈お前〉は平気で真面目に嘘をつく　虚飾の闇色を重ねる

〈明るい闇などという　同定の偽装あるいは怠惰な多重代位こそ語そのもの　つまり闇の働きなんだ〉

端的に還流し　語に付き纏う梯の

掴みえない仕草にすぎないではないか

〈闇も他者も　けっして鏡に写らないんだ〉

　不揃いの偽共振の笑い

　水晶の仮面が嘲笑う　見られていない

白けた朝陽がいつもの文字の傷を彫っていた

ぼんやりと　素面ゆえに予告はなく

　落花　カーテン　机上の壺　牝牛の像　増え続ける文字骨牌

　底なしの沼地を満たし　（書に埋もれた頃のように？）

いつからか死んだ水の　過ぎた源流は知らず

時を失った水流の針先――

俺は古傷と目覚めに抗い過剰な独白を反芻する

半覚醒の夢かもしれない　〈お前〉の唇が動く
「煌めく水の中の闇　太陽は反射を失う
　湧き上がる針　針　」
曙光の渦流の中　水没する未明の屋根屋根
夢だとも言えない　陽炎が沸き立つ瞬間だった
傷文字による装飾なのか？　本当なのか？　わずかでも光に舐められた物の形　〈お前〉も傷文字なのか？

塩素の苦い夢の袋が掌にあった
夢の気道から這い出る蔓草　奇形の文字
――かく言う鉛の語が空跡を擦るんだ！
悪夢を〈お前〉に譲渡し　共犯の傷を重ね彫ってやる！

剥がれない仮面の下の夢　無為と自傷の仮面　昼には通じない死人の独白……　何を言っているんだ！
「疲れすぎているんだ！」　俺は朗らかに言う
〈断じて俺ではないお前のことだ！〉
おお　〈お前〉　やはり十全に生きている仮面の死者よ

〈お前〉狂った陽炎　不死を驕る焔
　だがはっきりと手応えはなく
疲労と再生の熱病の中
誰のものでもない透明の噴水が身を捩っていた
虚無の水平線に身を屈め　未分の　水滴（トートロジー）の語を撒き散らし

語が崩れる曖昧な朝だ（読解を誤ってはならない！）
屈託なく　膝を屈し謙虚に請うんだ
〈いったい何が消え去ったというのか〉と――

目覚めた喉につき纏う灰の匂い　不遜と虚言の

　しょっぱい霧氷(ガス)の唇よ　そう！

きっと消滅と**現れ**の　ありふれた息遣いのように――
中性の素顔を曝け出し
〈お前〉は少年の鉄錆の匂いがしたはずだ

血を分けた仮面の　変わらぬ温もりの中　燠灰から生まれる花唇(エクリチュール)の囁きだった　きっと忘れかけていたんだ

（平面(ある)　織布(テク)と記譜(スト)の色）

（消え去る文字(トートロジー)の形　傷）

　それでも途切れなく織り続け
おお　陽炎の〈お前〉の骸を覆う　ありえない織物なんだ
　　いや　生きている〈お前〉……

2019年8月21日(水)

目指すべき「詩」「詩人」

錯乱　II
言葉の錬金術

　聞き給へ。この物語も数々の俺の狂気の一つなのだ。
　俺は久しい以前から、世にありとある風景が己れの掌中にあるのが自慢だったので。近代の詩や絵の大家等は、俺の眼には馬鹿馬鹿しかった。

夏、朝の四時、
愛の睡りはまださめぬ、
木立には、
祭りの夜の臭ひが立ちまよふ。

向うの、廣い仕事場で、
エスペリイドの陽をうけて、
もう『大工等』は
肌着一枚で働いてゐる。

苔むした『無人の境』に、黙りこくって、
勿體ぶった邸宅を、大工等は組んでゐる、
街はやがてその上を、
偽の空で塗り潰さう。

ヴィナスよ、可愛い『職人共』の為に、
バビロンの王の家来達の為に、
暫くは心驕った『愛人達』を、
離れて来てはくれまいか。

あゝ、『牧人達の女王様』、
大工の強い腕節が、眞昼の海の水浴を、
心静かに待つようにと、
酒をはこんで来てはくれまいか。

★

俺の言葉の錬金術で、幅を利かせてゐたものは、凡そ詩作の廃れものだ。

素朴な幻覚には慣れてゐたのだ。何の遅疑もなく俺は見た、工場のある處に回回教の寺を、太鼓を教へる天使等の學校を。無蓋の四輪馬車は天を織る街道を駆けたし、湖の底にはサロンが覗いたし、様々な妖術、様々な不可思議。ヴォドヴィルの一外題は、様々の吃驚を目前にうち立てた。

而も俺は、俺の魔法の詭辯を、言葉の幻覺によって説明したのだ。

この精神の乱脈も、所詮は神聖なものと俺は合点した。堪へ難い熱に憑かれて無為の日を過しては、俺はけもの等の至福を羨んだ、――穢れをしらぬ土龍の睡りや、幽界の無垢にも似た青蟲を。

俺の性格は鋭く痩せて行った。物語の中にゐて、人の世には俺は別れを告げたのだ。

2019年10月28日(月)

触っているわけではない　　触れない

嗚咽する骨ばった半音

助詞のない奇語

　浮いた表面　表面はない

錯乱する弦音の肌

そこに手のひらをそっと差し入れ　愛しく

震えが手のひらから骨に響き　**読む**

桜色のピアノの頭蓋骨も震え　辛うじて

震えから**掴む**　指を幾重にも曲げ

語(テクスト)の楽譜の襞を手(Begriff)のひらに重ね

語の骨音　温かい血の列　なぞり　**読む**

喉に激しい同調の気流が渦巻く　変調の　透明の骨語ゆえに

咳き込むように応答の語を**語る**

――すべて触れない楽譜にすぎない

――『桜プラスチック/空中オルガンより』「置き去りのピアノ」の一節

肺腑が飴色に切り裂かれる　逆流する絶息の瀑布

〈硬化し狭い気道をさらに締め上げる者がいる〉　本当か？

親和の背骨の真ん中を揺すり　**俺はお前だ　と言う**

　夜毎訪れる身内のものならばこそ　本当か？

崩れかかった他人の肋骨が抗う

高熱の血脈を酔わせ　心地よい痛みの中

差し込まれる鮮やかな色違いの血よ

「空一杯の桜プラスチック」という常套句？

違う！　病んだ肺への素直な気遣いの

思いもよらぬ金色の水の囁きに浸れ！

弱々しくとも穏やかな喉声の　一枚の布の優しさよ！

　簡明すぎるゆえに抑揚はなく

血を分けた端的な同一結合の化学式のよう

雨滴の脈拍一つ　〈滑らかに単調に！〉

　笑う血よ　健やかさよ

　応答とは　他者とは

✷

澄んだ高音　風笛の叫びを聴け！

拒否を許さぬ狂った応答だった　何度も何度も

青白いマネキン唇が放つ　無抵抗の息遣い

諍いはあろうはずはなかった　生きながら

死んだ者たちの悲しい虚空を満たすばかり

斑模様の夜の雲の下　時として　木漏れ陽の銀波に紛れ

稀有な夜　偽夜の森　彷徨い続けてきたんだ

望んだのは正確な応答だけであったはずだ

――『桜プラスチック/空中オルガンより』「日蝕の森」の一節

2019年11月7日(木)

モロイの沈黙　　ジョルジュ・バタイユ　　古屋健三訳　『詩と聖性』所収

根元的な現実

…『モロイ』とは不浄な幻想なのだ。同時に。これ以上にまた必然的で説得力に富む物語もない。『モロイ』があらわにしているものはただ単なる現実ではなく、純粋状態の現実なのだ。それはもっとも貧しい、だが不可欠な現実であり、われわれの前に絶えず姿をあらわしていながら、絶えずある恐怖から遠ざけられ、われわれがそれを見ることを拒み、そこに落ちこまないために絶えず努力を払わなくてはならない、そしてただ胸をしめつけるような不安という捉えがたい形でしかわれわれに知られていない、そのような根元的な現実なのである。

企ての漂流状態

…ぼろ着につきものの美しさがおりなす無名の姿、無気力で無関心な眼差し、幾世紀にもわたってしみこんだような不潔さ、それは要するに梶を失った存在であり、われわれがすべてそうである企ての漂流状態なのだ…。

名づけられないもの

…われわれにはそれを名づけけることができない。それは不分明で、必然的で、捉えがたいものであり、それは沈黙であって、そしてそれだけなのだ、と。われわれが無能力なばかりに浮浪者とかみじめな人とか名づけているものは、実は名づけられないものであり、…死者に劣らず無言である。

会話の亡霊　見せかけの会話と人間性

…彼のうちに残存する、というより涸渇していく言葉はもはや彼を担うことはなく…そして同様に、言葉が彼に到達することももうないのだ。彼と交しうる会話はことごとく会話の亡霊であり。見せかけの会話にすぎないだろう。そうした会話は、かえってわれわれを遠ざ

け、なにか見せかけだけの人間性に追いやってしまうはずだ。街をのろのろと行きながら人の心を魅するあの残骸が告示している人間性の不在とは別なものに、われわれは追いやられてしまう。

2019 年 11 月 8 日(金)
宇野邦一『日付のない断片から』　書肆山田　1992 年

　時間の骨をふみわけ　錆びた鎌を手に　斜面を転がっていく　かきむしった言葉　生きたことのない町に　雷のように降ってくる愚かな神たち　毎日震えては腐っていく光　そのかすかな影を舐めながら　暗室の柔らかい体を感じている

　闇を滑ってくる硬い手に　きみは内側からのぞかれたきみの形を認めることはできない
　人のいない自動車の列が等しい速さで通り過ぎる　窓にはりついた人影のむこうがみえない　否定的な容器の内部におしこめられた言葉の森　他者の魂を食うこと　きみの魂を他人たちに食わせることができない　明るい世界の輪郭は　拒食性の憎しみに変わる　きみの同一性の消耗　きみの微分　ぼくの遠近法　連結されない風景の空白に　むごたらしい青い絵　季節は凍結されたのだと思う　地形は切断されたのだと

　頭の中の闇、闇という言葉のまわりに広がる闇、辞書のうえの爪。
　意味は雲、意味は卵。
　意味よりも叫び。叫びは意味から隔たっていく。叫びは意味に戻っていく。
　砂糖が水に溶ける時間。氷が溶ける時間。意味が無意味になる傾斜。
　音楽のなかにも含まれる命令。それがほんとうの意味?

闇を裂く爪。
世界はやわらかすぎ、言葉はかたすぎる。
声は暗喩に包まれて、あらかじめ死んでいる。言葉のなかの言葉が、あたかも世界だと見える。そんなふうに、声は死を宣告されている。言葉を憎悪するべきだ。

砂利のような書く理由。言葉と戯れる。意味と闘う。砂利をつみあげ壁を作る。何も記録しない。何も描写しない。何も語らない。つみあげた砂利は崩れる。理由は崩れる。砂利だけが残っている。光がない。砂利を握り、重さを測っている。誰かいる。誰もいない。

暗い部屋で彼は何かを待っているらしかった。部屋の壁は薄かった。彼は死者となった自身を前にして、瞑想しているのであった。壁はうすいのに、町の騒音、人と物が送ってくる信号はかすかにしか届かないのであった。彼の前の死者となった男は、そのわずかな信号から、たえまなく幻想を紡ぎ、その幻想から生み出されたものが、彼の前に生きている一人の男、まだ生きている彼自身なのであった。

……（きみは厳密に、そこからは、もう後戻りはないという。きみの不眠の夜にぼくは迷い込む。その夜に震える電線の細い鞭。鞭のような眼が見ている。体が内側の光に透過される。体は鉱物になっている。無数の細い線がそこに揺れる。掌ほどの表面にも砂漠はある。）

その断片が言おうとしていたのは実はこんなことだったと、いま私のかわりに実現すること？
その私の断片をそれとはもう無関係に、一つのフィクションの中にすべりこませること？
いずれにしてもおまえはまったく私の許可もえずに、私の作品を改竄した。

1

　闇を滑ってくる硬い手に　きみは内側からのぞかれたきみの形を認めることはできない　人のいない自動車の列が等しい速さで通り過ぎる　窓にはりついた人影のむこうがみえない　否定的な容器の内部におしこめられた言葉の森　他者の魂を食うこと　きみの魂を他人たちに食わせることができない　明るい世界の輪郭は　拒食性の憎しみに変わる　きみの同一性の消耗　きみの微分　ぼくの遠近法　連結されない風景の空白に　むごたらしい青い絵　季節は凍結されたのだと思う　地形は切断されたのだと

（宇野邦一『日付のない断片から』）

路地裏にて

「他者の魂を食うこと」。風景の空白のなかに告げられる恐るべき断言。凍結された季節、地形は切断され、闇の空白に滑ってくるきみの硬い手。・・・「他者の魂を食うこと」という硬い手は「きみの魂を他人たちに食わせることができない」という憎悪の拒食に震える手でもある。詩人は偽愛を拒否する。他者により切断された地形ゆえの渇望。他人への迷いはなるほど凍結の潔さに比べるとむごたらしい。相変わらず地上は連結されない風景の空白だ。人のいない等速の車列、人影と見えないその向う、明るすぎる世界の輪郭は空白の影なのか。きみとぼくとの交換の距離を嘆くのか。拒食に苛まされる迷いか。宇野さんは、「他者」「他人」「きみ」と微妙に言換えている。言換え、滑っていく語り口。率直な迷いがそうさせているのか。上品によそよそしくもない、明瞭な憎しみの巧妙な牙だけが光る。果たされない、

他者を食うこと。魂なんか知るもんか。
その通り！語っているのは「否定的な容器の内部におしこめられた言葉の森」の語だ。俺にとってその森は日々暗い闇である「日触の森」であった。太陽はない。容器さえも定かではない。なぜなら引用は容器でさえないではないか。暗い石塀を伝い垂れ流しの雨の中、傘をさして路上を彷徨ってきたんだぜ。だから一切の記憶から引用の道を消去したいとまずは思う。新しい道、他者を食う道。ここに宇野さんだって言換えを微妙に滑り込ませているじゃあないか。新しい道は他人である宇野さんの言葉の森に繋がる、あるいは森の葉に隠された道を探しに行こう。拾うべきものは、今度は否定の容器なんかではない、塀にはちがいないきみの石だ。魂なんか知るもんか。言い換えだ。

2

　暗い部屋で彼は何かを待っているらしかった。部屋の壁は薄かった。彼は死者となった自身を前にして、瞑想しているのであった。壁はうすいのに、町の騒音、人と物が送ってくる信号はかすかにしか届かないのであった。彼の前の死者となった男は、そのわずかな信号から、たえまなく幻想を紡ぎ、その幻想から生み出されたものが、彼の前に生きている一人の男、まだ生きている彼自身なのであった。

（宇野邦一『日付のない断片から』）

石塀の角

死者が蹲る棺　まだ生きている　微かな信号と幻想　まだ生きている　生きているという実感が外の風のように安らぎを送ってくる？　薄い壁に密着し感覚を集中させる　微かだがたえまない信号から幻想を紡ぐ　彼は膨らんだ幻想から生み出された彼自身である一人の男だ　ならば町の騒音、人と物の中で自立する生者なのか　やはりあやふやな存在だ瞑想の中で彼はすでに死者なのだ　あろうはずのない死者の感覚に向き合う　相変わらず棺が置かれた暗い部屋　それでも幻想が形を整え安らぎへの渇望に疼く　かくいう彼自身の感覚と混じり合う？　それも幻想にすぎないと生を確認する　彼はたえまなく突く信号の薄い壁に囲まれたままだ 死者の感覚に濡れながら　まだ生きている　彼の前には死者となった自身がいる　本当は棺から彼は生まれたんだ と混迷の瞑想が告げる

端的に壁はない、信号は隙間なく襲う、無駄な瞑想もしない、信号漬けゆえに幻想はありえない、町の騒音の中で信号どおりに直線のように生きる、明るすぎる凡庸な町。言い換えを駆使し宇野語はナレーターのように滑らかに語っているんだ。俺はテクストの信号に耳を震わせる。やはり薄い壁は取り払えられない。棺の壁の前で無為の死者と向き合い同化するしかないのだ。なぜなら宇野語がそう囁いているからだ。そして再び初めの詩文に戻ることになる。陰気な瞑想が陰画の幻想を読む。

そう、齟齬もなく宇野語が明瞭に語っているのはすべて逆の、回収不能の言語のことだ。再度言う。すなわちかく語り、そしてまちがいなく詩的幻想が「彼」を生者に変える。まだ生きている俺のような「彼」自身。積み上げた言葉の煉瓦の壁という幻想に嵌った「彼」。棺に収まっているのなら暫くは詩のように黙れ!

言い換えの真意　流通する直接的な意味を辿りつつ　至近ゆえに案配を逃れた幻想を抱く死者という幻像を掴む　さらにこの明るさにおいて他人の中にいる平明な彼を暴く　彼もまた同格の死者なのだ　廃棄されつつある直接言語　つまり不可解なまま詩語による存在の繊細な二重性が蘇る

「日蝕の森」　＝陰画の世界　写真論でもある　その印象としてこのカットがいいかなあと　陰画というより　壁に囲まれた死人の感性　棺に蹲る　この最小の行為を　まだ生きているらしい感覚において　外の信号を幻想に変え　幻想を食ってかろうじて生きるという自己像・・・これが若き日の宇野さんの構想だと思う

2019 年 11 月 21 日(木)

『日蝕の森』から

あえて好き嫌いでいえば　このカットは好きな写真の一枚だ　理由は俺の個人的な思いに絡むからだと思う　こじつけに近いが。なんのことかというと　何年か前から温めてきたことだけれど最近特に強く思う。ようするに　作品においていわゆる世間的に付き合うことは止めた。ジャーナリズム　いわゆる詩壇　「詩人」「写真家」とかいう糞族群・・・辟易だ　たんなる受け狙い　編集者なら裸眼に映るであろう作家という売文屋　なんと惨めなことか　素養のない業界人に売り込む屈辱に鈍感なことほど最大の恥知らずはない　漱石の小説で出世を夢見る主人公をいわばありのままに描き読者にざらついた違和感を与える場面があったことを思い出す。そして戦後の荒地時代の騒擾をすぎて今度は裸電球の下宿の汗臭い布団の中で自慰にふけるウサギのダンス。飲み屋で騒ぐ文士、枚挙にいとまない。　･･･潔く世間と決別しよう　一言でいえばこういうことだ　なんと言われようと　俺は自分の影と重なる　重なっているはずだ　世間の襤褸というか通俗言語に溺れた幻想の他者ではない、丸ごと生きている他者に迫る　他者は身近な者だ　遠い星の他者ではなく至近ゆえに他者もまた他者の影であるほかないとわかるはずだ　勝手に他者への旅というか接近の旅を始めよう　つまりそういうメッセージがはからずも定着したカットだと勝手

に思うことにした　旅人　散策者といえばレリスの『バルセロナの散策者』に刻まれた峻烈な言葉を思い出す　散策者はおのれを飲み込む噴水の水滴と化す　ついでに言うと他者に迫る行為の核心は　他者のテクストを芯から読解する　このことに尽きる　読解の能力が求められる　努力の意義の集約だ　断言する　テクストを読みもせず理解できる??　超能力者か　まあそれも愉快だ　としなければ世間では生きていけないというより芸人世間だから超能力者こそ立派だ　不覚であれ人類は元々何かの信者だからだ　肝心なことはつねに理解は中途であり　それゆえに他者が絶えることはないんだと自覚することだ　と独り言　句読点もなんもなし

この常套的な写真からいろんな反省が湧いてくる　なぜ常套的かというと常套的だからだつまり安易すぎる　人影たちを遠くに見、しかも逆光で浮かび上がらせ固定させ一枚の画にする　さらにこの固定画の仕上げとしてここから一歩も踏み込むことはないという身振りだ　怠惰な画家だ　人を遠近法の消失点におくことが悪いというのではない　様々な場面の成り行きがそうさせている　肝心なことは他者の微分化だ　そのうえで遠近法が作用するとして　両者が生み出す隙間　なんとも複雑で時としてむごたらしい空隙　そこから醸し出すやりきれない一種の情というもの　これらがきっと創造的写真というものだろう　常套とまさに紙一重に重なりつつ反省により異質のものと化す創造の写真　そういう写真こそ掴みたかったはずだ　退屈な影絵は遊びにもならない　小動物のダンス

捨てられなかった一枚　乱雑に置かれたコップや皿やランプ　曖昧な光がこれ等の物たちを浮かび上がらせている　ただそれだけの写真だ　キリリと光るコップの縁と中の水　テーブル写真といえばジャン・グルバーを思い出す　彼女の作品は大型カメラの画像調整により、歪みのないすこし人工的な視覚世界を表す　端正すぎる印象をけすためにかテーブルの上は乱雑を極めている　つまり視覚の厳密な補正と偶然の同居だ　曖昧さによってのみ成り立つかのような創造行為を強調するように画面はあいまいなグレーだ。考え抜くことが彼女の作風だ

これ　なんかいいんだよね　自分でいうのは変だけど　何とも言えないなあ　あいまいな

んだけれど複雑で解けない問題が迫ってくる感じ　言い過ぎか　いや、問題なんかどーでもいい

- やはりこれはつまらない　なぜかというと明らかに無気力感が7割だね　無気力感に共感するなんてどうかしてるよ　ったく
  20 時間前返信

- **nobuzo.hotta**
  @nobuzo.hotta ちがうね　肝心なことは隙間のない現実感覚だ　ということは無気力感もふくめて　どうしたら現実的というか肯定的になれるかだよ　答えは簡単　冷静に現実にはまる　適正に対処する　次々に滞りなく課題に取り組み解決する　つまり機械になることだ　機械に無力感なんかあるわけねーよ　政治世界も然り　無力感の対語は断じて倫理ではない　正義の旗の欺瞞は酔狂に似合う　人類は麻薬の救済が必要だった　宗教と革命の麻薬だ　なんていう屁理屈をこねる暇があったら仕事に戻れ

言いたかったことは、「他者を齧る」ことだ。自分にとって意味のない光景も記憶も消し去り、目の前の他人さえ眼中になく、蛸壺に籠り、他人に興味もなく、テクストのお気に入りの端っこだけを齧り結局自慰にふける。自己防衛のための日蝕現象だといえば神はよくわかっている。それほど他人を齧ることは人類には難問なんだと納得する。アイドルがもてはやされる。

ただし「記憶から消えた道」とは、迷いつつ消えかかりなお残ってる像たち、つまり生きた脳の性分らしく、演歌というか暗いノスタルジでもあるようだ。病んだ脳か。わはは。

このシリーズの大半は、ライカ M6 で撮った　GR も混じっている　いずれももちろんフイルムだ　TMY を感度＋200　さらに増感現像　薬品は二浴でコントラストの幅を広げた　黒の締まりを強めるためにオランダ製だったかともかく高い紙にこだわった　等々　気の遠くなるような面倒な工程だった　作家たちはそこの「技術」で競い合った　木村伊兵衛　土門も　つまり写真家といわれる特権は技術の特権でもあったわけだ　今日　こうした写真的特権がほとんどなくなり誰でもサルにさえ撮れるようになったとき　それでも残された写真に問われるのは　撮る行為　目の意識の問題だけになる　それは旧時代においても同様なのだけれど特権写真家の当然の跋扈により久しく写真の本質問題が暴露されることはなかった

「外観、質感、触覚、想像力」。写真の成立要件としては、まさにこれらだけで十分だろうと思う。他の要件は写真成立にとっては不要だ。ところが、例えば商業・観光・ジャーナリズム等々のいわば「用途写真」においては他の要素が強く求められる。私が言いたいことは、需要などに関わりなく、さらにそこに付きまとう「世間目線」にも関わりなく、そしてもっと肝心なこととして、世間需要にも世間視線にも関わらないとする「写真家」自身の視線とは何なのかという問題だ。一切に関わりなくただ「外観、質感、触覚、想像力」にのみ神経を注ぐ営みだ。

一言でいえばそれは「孤独」といえようが、しかし、通俗的・道徳的・社会的孤独のことではない。孤独であるとは難問に属する。孤島の孤独を美しく描いたドゥルーズの『原子と分身』やマラルメの日常言語と詩的言語の二重性論、さらにこれらから敷衍したであろうブランショの文学とイメージ（写真）についての思索等々が想起される。

いずれにしても、孤独から発する写真イメージは、垢塗れの言葉である「現代思想」の畑で涵養され、先の「外観・質感・触覚・想像力」の要素もまた、思想の枠組みに組み込まれている。

とはいえ、その在り方といえば、もちろん「概念的」であろうはずはなく、写真・水面に漂う陽炎、亡霊のように現れ、その実践の問題に属するであろう。私にとって、「無感覚物体」の表象はこれらの問題意識に直結するんだ。

ついでに一言、言えば、その亡霊が気味が悪いとかの衣装をまとうものではない。

写真に対して、「暗い」「美しい」「汚い」等々の形容詞は私にとってはほとんど意味をなさない。亡霊は不可能の言換えにすぎない。

　そうそう、ムード、雰囲気です。先に「外観・質感・触覚・想像力」などと味気なく書いたけれど、さらに亡霊・不可能、孤独とも書いたけれど、実は、それらの現れといものは、拭い難い「情緒」の衣を纏っている。それがムード、雰囲気だ。「そこにいる」というリアリティにだけ還元されるのではない、むしろどこにいるのかさえ不明の、しかし確かなリアリティがある、というややこしい雰囲気にうっとりする。
独り言でした。

あなたの作品から様々なことを考えさせられました。抽象と見られる数多の他の作品との違いのことです。さらに映像のいわゆる皮膚感、ざらざら感についてもした。抽象も皮膚感も、それらが現実の様相やお馴染みの言説に還元されるなら、写真はそれらの特定科学のレポーターにすぎません。皮膚感が欲しいなら抽象ではない具体物リンゴを齧ればいい。こういう初歩的な問に対して、あなたの作風は迷いつつも軽やかに解決の路を示唆しているように思います。

つまり、抽象に逃げることなく、さらに現実やお馴染みの言説に還元されることなく、その一歩手前で立ち止まり、作家の脳に生まれた、生まれたての、何ものにも還元されない不思議なイメージ、それこそ写真に親しいのだろうと思います。写真が向き合う目の前の物を取り込みつつ、このいわば純粋イメージをつかみ取ろうという姿勢が感動的です。純粋イメージとはもちろん中性的ですよね。

これに反して、比喩的にいえば、たとえば不可避の悲しい出来事、身内の者を失うことなどに遭遇している人に対して、安直に宗教の慰めとか医学の弁解などなんの力にもならないし、ましてや死・死体・不気味な物についての恐ろしいイメージを見せること、それこそ残酷で中性的でもなんでもないですよね。

避けられない死は直視しなければなりません。ただしこの健全な直視とは、一切の分かり切った無力な言説に結び付くものではなく、医学にも社会学にも美学にさえも、何ものにも還元されることなく、ひとを広大無辺の宙におくほどの力と生の優

しさ・激しさの始まりとしての、中性原子のように、中性的な力でなければならないのではなかろうかと思います。ちょうどあなたの灰色の平面にまさに形なき形を生み出そうともがく、イメージの作品のように。などなどいろいろ考えさせられました。ありがとう。

金環を齧る　マグマ骸体のダンスとは、地底マグマの焔に包まれた焼身体のイメージ　だがそう言ってしまえば、漫画だ。それでも拭い難いし生涯、日々の実感でもあるからこそ、目の前にせめてもの「架空のオペラ」（周知のランボーの詩句）を描き、あえてそれを暗さからは回復可能であろえ「日蝕の森」の舞台としたんだ。つまり幻想というより、日蝕に襲われ沈んだ太陽の奪還のために、紛れもなく存在するであろう太陽の、地上視線の裏側に回り込む、このいわば二重視線が、落胆から這い上がるべき健康な視線なのだよ。友よ、日蝕に溺れるな、負けるな。金環の氷花　桜色の光を飲む

2019 年 11 月 21 日(木)

バルセロナの散策者　　ミシェル・レーリス『癲癇』より　小浜俊郎訳

いつまでもおのれ自身を噛む噴水
あるときは高い空に向かい先細りする茎となって昇り
あるときは祭の位地光る泉の渦巻き　あるいは陳列の滝となってひろがり
無一文だが
地平線に目をやって空腹をまぎらせ
並んだ舗石に穴をあける旅人のように
噴水は空中に井戸を掘り　空気は噴水を食べる

（中略）

旅人は額の汗をぬぐい
懐中時計を引きだす
それから境界石に腰かけて面白そうに船を眺める
甲板の上方にかかる背光はすこしもなく
まったくありふれた船

（中略）

わざとらしいその技巧が
よだ睡の罠や涎の長い列にほかならぬ饒舌の説教師よ
おまえがおろかにも讃めたたえる難行苦行は
だが少量のミルクのように苦悩を飲むマゾヒストの聖別されたパンとして
おまえには思いがけぬ効果があろう

熱病でずたずたに切られた頭蓋と
前代未聞の罰に痙攣する用意がととのった　敏感な背骨
苦悩の海の堪えがたい波しぶきを味わうために
散策者は　油で汚れた水を前に腰を下ろしていたのだ

（中略）

おお怖れおののく者!　おまえは
幻覚の国々へ出航する前に
おのれの影の嵐に打ち負かされているので
船の横揺れは　おまえの眼には
あらゆる水平線と一致する虚無の
恐ろしい暗いシンボルなのだ

そして今　歳月よ崩れ落ち
潮流よ後脚で蹴り
火山よ噴き出し
家々姿を消すがいい
われとわが身を食べながら動くゆえに
燃えるあの噴水に似た通行人の
至上の装飾へと　裸かの砂漠は化すだろう